

令和 元 年 6 月 28 日現在

機関番号：32694

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13206

研究課題名（和文）合衆国東海岸都市部におけるイスラム系移民の文学・文化活動

研究課題名（英文）The Process and the Achievements in Literary and Cultural Productions by Muslim Americans in Urban East Coast of the U.S.A.

研究代表者

有馬 弥子（Arima, Hiroko）

恵泉女学園大学・人文学部・教授

研究者番号：70212652

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究はアジア系アメリカ文学研究の一環としてパキスタン系でありムスリム系であるAyad Akhtarの劇作、および小説の研究を出発点とし、発表はAkhtar作品についての発表と論文執筆を中心にすすめた。

同時に、ムスリム系作家による文学・文化活動に関連し、アラブ系アメリカンによるそれらに研究領域を広げるため、東海岸都市部在住の文芸誌Banipal編集者を通じ、アラブ系アメリカンの最新作品の入手を続けた。アラブ系による作品について最新情報を追う内に、ムスリム系およびアラブ系にとってのパレスチナ系文学作品の特異性が浮かび上がり、この領域を今後の新たな研究課題の重点項目として加えるに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エスニック米文学研究、多民族文学研究には未だ深めるべき領域が多い。本研究者は2000年よりアジア系アメリカ文学研究に、2008年以降は南アジア系による作品研究に着手。2015年にパキスタン系のムスリム系二世Akhtar作品を知り、同時多発テロ以降のムスリム系アメリカ文学および関連文学作品に注目するに至った。2016年以降本研究期間（2016～2018）にムスリム系作品研究の目的でアラブ系最新作品も追うようになり、その過程でパレスチナ系アメリカンの特異性に着目するに至った。これら領域の研究は、従来作品の研究はもとより、情勢変化が激しい中東地域出身者の状況を反映し新規性と意義が深まっている。

研究成果の概要（英文）： This study has stemmed from that on Asian American literature, specifically the works by Ayad Akhtar, a Muslim American of Pakistani descent. Academic presentations and papers during the term primarily centered on the critical analysis of his plays and his one novel, all about Muslim Americans.

At the same time, the present researcher continued to endeavor to collect the most recent works by Arab Americans, specifically through one of editors of Banipal, who works in urban East coast.

Once this area was pursued, it has grown apparent that the area of Palestinian American literature and culture forms a very peculiar and significant part of Arab and Muslim American literature, which, however, has been turning out to be an extremely complex issue. This area is now one of the central part of the future study.

研究分野：アラブ系アメリカ文学、ムスリム系アメリカ文学、アジア系アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 アラブ系アメリカン ムスリム系アメリカン パレスチナ系アメリカン イスラーム
合衆国東海岸都市部 Ayad Akhtar

1. 研究開始当初の背景

本研究者はアメリカ南部の代表的な女性作家三人の短編小説について Ph.D. 論文をまとめた際にはジェンダー 이슈に焦点を当てた。当時アメリカではジェンダー研究が文学研究の一領域を成していた。その後、ジェンダー研究の中でも、より新規性があるマイノリティー研究としてセクシュアルマイノリティーをテーマにした作品の研究に着手しようとしたが、既に膨大な数の作品と先行研究が存在していた。そこで注目したのが、アジア系アメリカンによるセクシュアルマイノリティーをテーマにした作品の研究であった。このような経緯で 2000 年以降アジア系アメリカ文学研究に着手した。

アジア系アメリカ文学研究の領域では、既に日系アメリカン女性のセクシュアルマイノリティーをテーマにした作品についての研究が発表され、日系アメリカン作家については既に網羅的に研究されていた。また、その他の主だったアジア系である中国系、韓国系、ベトナム系、フィリピン系アメリカンなどについても多くの先行研究が既に進んでいたため、2010 年以降は日本では先行研究の少ない南アジア系による作品研究に着手した。2015 年には、その中でもパキスタン系アメリカン二世でムスリム系でもある Ayad Akhtar のピューリッツァー賞受賞作を知り、同時多発テロ以降のムスリム系をテーマにした作品に着目するに至った。本研究に応募する時点で、ムスリム系アメリカンの作品を研究する目的でアラブ系アメリカンに関する最新作品および文学・文化活動の動向も把握していく研究計画を立てた。

2. 研究の目的

本研究では同時多発テロ以降アメリカで先鋭化したムスリム系アメリカンの苦境の背景がどのように文学作品に映し出されているかを研究することにより、ムスリム系が困難に対処するためにアラブ系内部で、また他民族との間で、どのような支援関係を築いているか、逆に確執などはあるのか、および文学・文芸活動はこれらをどのように描くことにより、またどのように制作関係者間のつながりを構築しているのか、どのようにムスリム系を支援しているか、これらの点を明らかにしようとした。

上記について、特に 2010 年以降の最新作品、さらに 2015 年以降の作品を中心に追うことを目的とした。期間開始時にはどれだけ最新作品が発表されているか不明であったが、期間中に 2015 年までに発表された最新作品を入手することができただけでなく、2016 年から 2018 年の間も発表され続けた最新作品を入手することができた。これらの作品が不安定な中東情勢を反映していくことは予想できていたので、情勢の変化や悪化が文学活動にどのような影響を及ぼすのかを把握するという目的は達することができた。

3. 研究の方法

2. に記した状況に関し、同時多発テロが起きた合衆国東海岸都市部における文学・文化活動に特化し研究をすすめる計画を立てた。ニューヨーク在住のアラブ系文芸誌 *Banipal* 編集者らのインタビューを中心に、当編集者ら周辺のムスリム系、アラブ系アメリカンの文学・文化関係者のインタビューを重ねた。これにより最新の上記領域文学・文化活動を追いつけた。

これらの目的のために計 6 回ニューヨークに渡航した。本研究開始時にはムスリム系アメリカン、アラブ系アメリカン作品のルーツである中東を訪れることができるかどうか定かではなかったが、上記ニューヨーク在住のムスリム系およびアラブ系文学・文化関係者らを通じ、最終年度 5 月にはレバノン在住の文学・文化関係者にインタビューする目的で都市部ペイルートを中心にレバノンを訪れるに至った。

さらに、本研究の出発点であった Akhtar 研究を継続するために、Akhtar の最新作品 *Junk* 観劇の目的で 2017 年 12 月にニューヨークに渡航した。

また Akhtar 研究については最新作品を追うと同時に、現代演劇研究会に入会し、先行研究のない *The Invisible Hand* について発表した。当研究会入会により本研究に直接関連する作品を知り入手するための新たな道も開かれた。現代演劇研究会で取り上げられる作品の多くはテーマの面では必ずしも本研究に直結するものでなくても、劇作家、演出家、出演者、劇評家など多岐にわたる演劇関係者が Akhtar 作品のプロダクション関係者や Akhtar と関係があり、当初予想していなかった知見を得ていく重要な研究の場ともなった。

4. 研究成果

本研究では Akhtar 作品の内、既に日本で論文が二点発表されていた *Disgraced* については、これら二点の先行研究では十分ではなかったジェンダー 이슈の視点から論じた。Akhtar の他の二劇作 *The Who & The What* と *The Invisible Hand* についてはレビューは多く発表されているものの論文が発表されておらず、前者について論文を発表し、後者については現代演劇研究会で発表した。

今後、期間中に収集したムスリム系およびアラブ系アメリカンによる最新作品について発表していけば、更に新たな解釈と知見を提供することができる。また、本研究の出発点はアジア系アメリカ文学研究であったが、アジア系アメリカ文学研究は多民族文学研究の

一環であり、本研究を出発点にした今後のアラブ系アメリカン、ムスリム系アメリカン、パレスチナ系アメリカンによる、民族的マイノリティをテーマにした作品研究もまた、多民族文学研究の一環として、既に先行研究が多くあるアジア系アメリカ文学研究に加え重要な位置を得ていくことになると思われる。

本期間中に得られた重要な知見としては、アラブ系アメリカ文学の研究ではパレスチナ問題が特異な領域として位置付けられていることを挙げる。この領域は研究自体が脅威にさらされ続けていることもわかった。また、本期間中最終年度には、パレスチナ系アメリカンによる作品に特に注目するようになり、5月にベイルートを中心にレバノンを訪れた際にも、パレスチナ系の文学作品、文化活動について理解を深めることが中心となった。

文学作品および文学・文化活動に見られるユダヤ系アメリカンの問題とユダヤ系とパレスチナ系の関係は、3.で現代演劇研究会入会と例会参加および例会での発表について触れたが、5.には記さなかった発表と2019年4月に行った発表があった。これら二件の発表で取り上げた作品はPaula Vogel作 *Indecent*、David Yazbek 作 *The Band's Visit* であり、どちらもユダヤ系の視点からの作品である。前者はユダヤ系コミュニティにおけるセクシュアルマイノリティをテーマにした作品であり、後者はユダヤ系とアラブ系の確執を背景にした作品である。

Indecent はあくまでもユダヤ系とそのコミュニティおよびその中のセクシュアルマイノリティを中心的テーマにした作品であるため3.および5.には記さなかったが、本作品の劇中劇の作者であるイスラエルのユダヤ系劇作家がパレスチナを訪れたこともあるという記述が本作品の解説の一件の中に見つかり、ユダヤ系とパレスチナ系の深刻な確執は自明であるものの、果たして一かけらでも支援関係が存在するのかという、かねてからの疑問と期待が再浮上した。その後、*The Band's Visit* について研究したところ、当作品中、当作品の上演、また当作品についての論文などにおいて、ユダヤ系とパレスチナ系の間の、支援関係とまで言えるかどうかはさておき、交流関係があることを知るに至った。

この新たな知見について、本研究のベースであり出発点を提供し続けた *Banipal* 編集者らと周辺のパレスチナ系アメリカンおよびパレスチナ人に尋ねてみる段階には未だ至っていないと判断する。*The Band's Visit* が直接的にユダヤ系とパレスチナ系の融合関係を描かずとも、それを暗示していることが、パレスチナ系にどのように受けとめられるか探っていくことは今後の課題である。現に *Banipal* 編集者の一人、Khachan氏は *Band's Visit* について烈しく批判している。氏は文芸関係者ではあるものの文学作品についてのレビューなどは発表しておらず、研究目的の質問は、たとえ作品研究を中心に完結する文学作品研究であっても、研究倫理にもとると考えられる。

現代演劇研究会では、パレスチナ系とイスラエルの交渉と一時的和平を仲介したノルウェーの政治関係者を主人公にした *Oslo* が取り上げられたこともあり、本研究者はそれについての発表の機を逸したが、その後、本研究者自身が Yazbek 作品について発表する機会を得ることができたため、パレスチナ系とイスラエルをめぐる一連の作品を関係付けるという課題の前に立っている。本期間中の最終段階で両者の間の何らかの交流を暗示する作品や文学・文化関係の論評が何点か発表されていることを知ったのである。このイシューについて二者の間の衝突を、また一方の視点から他方を批判する立場の論評や作品は数限りないことは言うまでもない。

今後も本期間中に築いたパレスチナ系の文学・文化関係者との関係を維持していく姿勢には変わらない。そもそも文芸誌 *Banipal* 関係者らがパレスチナ系であることを本研究者に吐露したのも本期間中初めてのことであった。それまで明かさなかった理由があったのである。それまで明かさなかった理由もまた、今後の研究の出発点である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 有馬弥子 「ペンとヒジャブ：アクター作品にみるイスラームの諸問題をめぐる女性の模索と方向性」 恵泉女学園大学紀要 査読有 第31号 2019年2月 pp. 89-114
2. 有馬弥子 「アクター *Disgraced* と *The Who & The What* に見る女性芸術家の葛藤とイスラームをめぐる諸問題」 恵泉女学園大学紀要 査読有 第30号 2018年2月 pp. 151-172

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 有馬弥子 “Ayad Akhtar, *The Invisible Hand*.” 現代演劇研究会 月例会 2017年12月
2. 有馬弥子 「ペンとヒジャブ： *The Who & The What* に見るムスリム系アメリカン女性の模索」日本アメリカ演劇学会 第6回例会 2016年9月

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

有馬弥子 文献解題 査読無 “Ayad Akhtar *American Dervish*” *AALA Journal*. No. 24 アジア系アメリカ文学研究会 2018 年 12 月 pp. 61-64

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。